友史会 2025 年 7 月例会

「講座例会」

令和 7 年 7 月 20 日（日）　橿原考古学研究所　講堂

内藤元太　橿考研調査課　主任研究員
「令和６年度　中国陝西省考古研究院との交換研修報告」
黒澤ひかり　橿考研調査課主任技師
「令和６年度　大韓民国研修派遣報告」

[感想文　７月例会だより]

今年７月も酷暑により、昨年同様、お二人の若手研究者による研修報告(中国陝西省考古研究院と韓国国立文化遺産研究院)の講演会が「講座例会」となりました。

◆最初に、内藤元太主任研究員「令和六年度　中国陝西省考古研究院との交換研修報告」

中国の唐代以前の古代建築について現地で研究を深めたいとの念願が叶って、木造建築構造の変遷をまとめるための資料を収集した。中国北部では五世紀末から六世紀前半に大きな建築構造変化の躍進がみられるが、発掘調査で明らかになった建築プランから認識し理解できるか、中国の現地で建築遺構に関する情報を得ること、頭貫や斗共など建築に関する表現方法が、ひいては奈良県に所在する古代木造建築の極みと源を理解し、その構造の東アジアでの歴史的位置づけを解する上でも研究を進展させていきたい。特に柱をどのように立てるかという観点から（周原遺跡では掘立柱建築が多く見られたが）地上に置いた礎石の上に柱を立て、上部構造の木部の連結によって柱を自立させる構造が いつ頃成立したかを考えることは重要だとの見解を述べられた。掘立柱の住居が一般的だった当時の奈良の人々にとって、法隆寺は斬新な建築に思えただろう。

◆後続の講演は、黒澤ひかり主任技師「令和六年度　大韓民国研修派遣報告」

墳墓における埋葬儀礼について、百済の仏教寺院の舎利荘厳具の資料見学、扶余地域の遺跡の踏査、棺に倭特有のコウヤマキ材使用した武寧王陵、横穴式石室をもつ古墳で知られる宋山里古墳群では発掘調査、横穴墓が確認された丹芝里古墳群など、百済の歴史上重要な遺跡のお話に、今年六月例会で高井田山古墳（二つの棺が並列、副葬品の銅鏡や銅製熨斗など武寧王陵との類似）を巡った時のことを思い出した：五世紀末には日本と百済が北九州に限らず、 関西地方（大和川沿い）にも交流の場があった事に納得した。

百済から入った仏教の受容により新しい思想の導入だけでなく、当時の寺建立にかかわる瓦葺建物の建築技術、土木技術、仏像彫刻や装飾金工技術など多くの新たな知識と技術がもたらされた。

古代日本と韓国との外交が活発だったことは、文献以上に考古学的視点から読み取れる。だからこそ発掘調査で得られるデータや情報は、東アジア世界の枠組みの中で考えることが大事だ、と結んだ。

終わりに、内藤元太先生が中国陝西省考古研究院で、黒澤ひかり先生が韓国国立文化遺産研究院で、各々有意義な研修をしたこと、現地で多くの研究者と交流する貴重な機会に恵まれたことへの感謝の言葉で講演会が終了した。個人的には特に礎石上の柱と頭上の建築表現について、仏教の受容について、一層興味深く拝聴しました。ありがとうございました。今後の講演を楽しみにしています。

奈良市　原崎多世子